「満ちあふれる豊かさへと」

エペソ人への手紙３：１８－１９

May.21.2023

## エペソ人への手紙３：１８－１９（パワポ）

### Preface

先週まで３回に渡って、人知をはるかに超えたキリストの愛のその広さ、長さ、深さ、高さについて考えて参りました。

そして今朝は、「神の満ちあふれる豊かさにまで満たされること」について考えていきたいと思っております。

早速ですが、「私たちが神の満ちあふれる豊かさにまで満たされる」とは、どういうことでしょうか？

果たして私たち人間が、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされることが出来るのでしょうか？

パウロ先生ご自身、「こんな罪人が！」と誰よりも悩み、誰よりも自分の罪深さを自覚していた方でありました。　そして、自分のことを「罪人の中の罪人であり、罪人のかしらである」と告白するほどに、ご自分の罪深さを認めておられました。

それなのに、そんな誰よりも罪深い罪人であると自覚しているパウロ先生の口から、「神の満ちあふれる豊かさにまで満たされる」という、一見大それたように思える葉が口を突いて出て来て、その告白が実際になるようにと祈るのです。

では、神のどういう面において、私たちは、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされることが出来るのでしょうか？

神様が満ちあふれるほどに豊かに持っておられるすべてのもののうち、私たちが満たされることが出来、満たされることが出来ないものは何でしょうか？

神様が私たちに、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされて欲しいと期待しておられるものは何なのでしょうか？

### Part One

神様が持っておられる満ちあふれるほどの豊かさの中で、神が神であられ、神が全てをお造りになった創造主であられるがゆえに持っておられる、神様だからこそ持っておられる神のみぞ持つ独自のご性質は、当然ながら私たちが得ることは出来ません。

例えば、すべてを知り、すべてを統制し、すべてを動かし、すべてをコントロールしておられる神の全知全能性とか、何者にも依存をせず、何者からも一切の影響を受けずに自ら存在される自存性などは、私たちには持ち得ません。

そのような神が神であられるゆえに持っておられるご性質において、私たちが満ちあふれることは出来ないですし、決してありません。
ともすると、物事を知り、統制し、動かし、コントロールする力を得られる、得たいと思ったり、自分一人で、自らの力で生きられるなんてことを考えてしまうところが私たちにはありますが、それはあり得ないことですし、錯覚でしかありません。

では、どういう面において、私たちが神の満ちあふれる豊かさにまで満たされることが出来るのか、求めなければならないのか？
それは、品性においてです。

先週、キリストの愛の高さについてお話しする中で、御霊なる神が私たちとともにいて下さるがために、私たちキリスト者を測る物差しは、いつでも御霊の実だということをお話し致しました。
つまり、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制などの品性です。
能力ではありません。
手段や方法でもありません。
品性です。

私たちが、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされることが出来る、また期待されているものは、キリスト・イエスのような品性です。
愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制などの品性は、能力ではありませんので、他者と比較して優劣を付けたり、誇ったり、へこんだりするものではなく、人を生かし、他者を生かし、自らを生かすものです。

品性とは、対人関係において表れるものであり、神との関係において表れるものでもあります。
内に向かって自画自賛するものではなく、外に向かって、自分の外に向かって、自分の外のものにとって良いと思われることを選択していく意思であり、結果、自らをも生かされていく恵みです。
神を愛し、人を自分自身のように愛する時に表れるアレこそ、品性です。
神の品性こそ、私たちが、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされるように期待され、求められている信仰者としての目標です。

仕事が少し出来なくたって構いません。
効率や要領が悪くたって構いません。
まだ未発達で、未成熟で、未経験で、力が足りなくても構いません。
私たちに求められているのは、すべてを知り、すべてを動かし、すべてを統制し、すべてをコントロールする能力や力量ではありません。
誰にも迷惑を掛けることなく、自ら何でもこなし、あたかも他人が必要ないか

のように生きられる裁量や技量でもありません。
　品性です。
　御霊の品性であり、キリストの品性です。

Part Two

　ただ、品性という言葉を使いますと、何だかとても負担に感じますし、罪悪感だったり、自責の念だったり、「そんな品性なんか持ち合わせちゃいないし、これからも、まあそんなご立派な品性なんか持ち合わせることなんか出来ないよ。だからクリスチャンって、堅っ苦しいんだよ」と思ってしまうかもしれませんが、神が私たちに期待しておられる神の満ちあふれる豊かさにまで満たされるキリストの品性とは、堅っ苦しい息を詰まらせるようなものではなく、喜びであり、平安であり、慰めであり、安らぎであり、恵みです。
　そして、今もう既に、私たちに完璧に備わっているものではなく、そこに向かって行っている途上にあるという安心です。

　今だかつて誰も、そしてこれからも、この世で、この地上で、この罪なる世界で生きている限り、完璧にキリストの品性を持ち合わせたことのある人間なんかいませんし、もうこれ以上罪なる思いが思い浮かばなくなるとか、良いことしかしたくなくなるとかということではありません。
　それは、天の御国に行った時完成するものであって、この世で生きている限り、私たちが考えることと言ったら、純粋な悪事ばかりです。

　なぜだか、純粋な悪事ばかりが、先ず先に思いたってしまうのが私たちです。
　何よりも先ず自分の利益を考え、自分のプライドが傷つかないように自分を立てることばかりが思い浮かび、人の目にある小さなちりは本当に良く見えるのに、自分の目にある大きな丸太ん棒のような欲深さや自分勝手さは等は良く見えず、罪なるものにはホイホイついて行きながらも、その事実を認めることも、自覚することもまあ出来ないし、しようとしないのが私たちです。

　じゃ、キリスト者になって何が変わり、どこが変わったのか？
　何が変わり、どこが変わりましたか？
　私たちそれまでは、何となく罪悪感を覚え、本能的に間違っているかもしれないと思った節はあるかもしれませんが、罪だとは、はっきりと思えなかったことが、はっきりと罪だということが分かるようになりました。
　なっていませんか？

　例えば私の場合、クリスチャンになって初めてもらった聖書をマタイの福音書から読み始めた時、ある言葉にぶつかってハッとしたことがありました。
　それは、マタイの福音書５章のイエス様の言葉です。

マタイの福音書５：２７－３０（パワポ）

こんなにもはっきり人様から、「情欲を抱いて女を見る者は誰でも、心の中ですでに姦淫を犯したのです」と言われたことは、それまで当然ながらありませんでした。
「まあ、仕様がないよ、人間だもの。それを隠して、そうではないふりをしながら、むっつりスケベのように生きるよりも、『むっつりではない』と、あからさまに自分のスケベさに正直な方が人間らしくていいんじゃない」と言われたような、思っていたようなところがありました。
でも、イエス様ははっきりと、「それは罪です」と仰ったのです。
「神の言葉を通して生じるのは、罪の意識です」というローマ書のパウロ先生の言葉が、私の心の内に起こりました。

それ以降、私の中で、ありとあらゆる罪と、罪なる思いとの戦いが始まりました。
もう２０年以上前になりますが、韓国の神学校に通っていた時、牧会の現場で実際に牧会しておられる有名な牧師先生が教えて下さっていた「牧会学」という授業があったのですが、その授業の中で、先生がお話しされたご自分の経験談が今でも忘れられません。
その牧師先生が牧会されている教会の主日礼拝の中で、毎週聖歌隊の特別賛美が献げられていたのですが、とある日曜日の朝の礼拝の時、いつもと同じようにその先生は、聖歌隊の方に体を向けて、聖歌隊が賛美する姿を説教壇から見ていたところ、突然、その聖歌隊員の一人のご婦人が目に留まり、一瞬にして、そのご婦人と性的関係を持つ場面が詳細に頭の中に思い浮かび、その映像が頭の中を駆け巡ったということでした。
そういうことがあってから先生は、「次の週から、聖歌隊の方を見て特別賛美を聞くことはなく、目をつぶって聖歌隊の賛美に聞き入るようにした」と仰っていました。

その先生の正直な告白に、教室の中がシーンとなりました。
これは、その牧師先生のみの問題だということでは決してなく、これこそが、私たちの付け入る隙も無いほどの飽く無き罪人さ加減であり、私たちが心底罪人であることを表わす症状のうちの一つです。

また、同じ合同神学大学院大学校の「パウロ神学」という別の授業の中で、「牧師となったら気を付けなければならない三つのことがある」と教えられました。
それは、「お金と権力と女性（異性）だ」ということでした。

その話を初めて聞いた時、「いやいや、そんなことはないよ。僕は、お金とは関係のない道を行くつもりで神学校に来たし、権力なんていうあたかもそこに大きなものがあるかのように見えるけれども、空しい虚栄心のような無益なものには関心も無いから神学校に来て牧師になろうとしているわけだし、目の前

に魅力的な女性１００人に並んで頂いて、神様がこの中で、『あなたが最もいいなあと思う女性何人でもいいから選んでみなさい』とおっしゃったとしても、僕は躊躇なく、うちの奥さんを選ぶ人だから大丈夫だ！」と思っていました。

ところが、いつからか、神様よりもお金がないことに腹を立て、「お金が無いからこんなんなんだ」という不平不満が心に満ち、教会とか、クリスチャンの共同体という小さな組織の中においても、自分のプライドを立たせようと、自分の力を誇示しようとする権力におもねるヘタレな馬鹿さ加減が心を支配し、妻以外の女性を見ても、「綺麗だなあ」とか、「魅力的だなあ」とか、何の努力もいらずに、至って自然と心の中で姦淫を犯している自分を発見するようになりました。
クリスチャンになる前、神学校に行く前と大差ない自分自身を発見するわけです。
これこそが、キリストの満ちあふれる豊かさにまで満たされることを願い、説教し、生きようと、自分なりに努めている者の開けっ広げな正直な姿です。

それでは、どうしましょう？
諦めるべきでしょうか？
クリスチャンであることを諦め、辞めるべきでしょうか？

違いますね。
神様はそんな罪人のことを決して諦めなさいませんし、その人生の中に、それでも、着々とキリストに似たものへと変えて行っておられます。
では、どこにそれが表れているのか？
罪を罪だと認識することが出来るようになっていることに、先ず表れています。

以前の私には、罪を罪だと認識することが出来ませんでした。
「皆もやっていることだし、これぐらいのことなんか何てことないだろうし、そんな小さなことよりもはるかに悪いと思われることをしている人たちが、ごまんといるんだから大丈夫。
そんなのに較べたら、僕のやっていることなんて大したことないよ」と、思っていました。

ところが、今は違います。
罪が罪だとはっきり分かります。
嫉妬や怒りや裁きや蔑視、想像で犯す罪、思いで犯す罪、以前は何てことなかったことが、今は、罪だと認識できます。

Part Three

つまり、今の私は、もう一人ではないということです。

以前は、クリスチャンになる前の私は、私という一人の人間、一人の罪人、一人の孤独な人、一人の侘しい、うら寂しい一人の人でしかありませんでした。

ところが、今は、私一人ではありません。
聖霊なる神様が、私のうちにいて下さっています。
イエス・キリスト様が、私のうちに住んでいて下さっているので、はっきりと、罪を罪だと認識することが出来るようになっています。
「わたしはあなたをわたし自身のように愛しているから、申し訳ないけど、あなたの罪を真剣に指摘し続けるし、あなたを、罪と戦って血を流すまで抵抗する者とする」と、「変える」という私のうちにおられる聖霊様、イエス様ゆえに、罪の中にいることが、どうにもこうにも居心地が悪いように感じる者へと変えられています。

先週お話しました通り、神の高い愛とは、私たちとともにどこまでも、いつまでもいるという覚悟の愛です。
それゆえに、私たちは、苦しみます。
死が怖くて苦しむのではなく、力がなくて苦しむのでもなく、金銀財宝がなくて苦しむのでもなく、罪との戦いに苦しむ者へと変えられました。
罪と戦うために祈る者へと変えられました。
罪に打ち勝つために、神の助けを求める者へと変えられました。
また、罪に負けたとしても、再び神の前にその罪を告白し、悔い改め、自らの弱さを認め、「なおも、その弱さをともにして下さる主イエス様とともに生きて行くんだ」という覚悟の信仰を持つ者へと変えられました。

以前でしたら、人を見下げ、人に怒りをぶちまけ、人を裁き、人を注意し、人を指導すると、気がせいせいし、スッキリし、晴れ晴れし、そんな風に自分で正しいと思っていることを人に向けて意思表示出来る自分に酔っていましたが、今では、そういうことをすると、何だか申し訳なく感じますし、「自分のことは棚に上げて、お前何様のつもりだ？！　あの人に何だか悪いことをしたなあ」と、思えてしまいます。
私たちの真の戦いは血肉、つまり、人との戦いではなく、暗闇の支配者たち、もろもろの悪霊に対するものであるということを知ったわけです。

では、なぜ知れたのか？
一人ではなくなったからです。
キリスト者とされ、キリストとともにされたからには、私たちはもうこれ以上、一人ではないということを知りました。
「悪いけど、大変かもしれないけれど、わたしはわたしとして、神として、義なる者として、光なる者として、あなたに、わたしに似た品性に達するまで諦めもせず、見放すこともせず、愛しているがために、ともにいるがために、あなたに語り続けるし、訓練し続けるし、むちを加えることもあるけれども、決して気

落ちしてはいけないよ。
　その罪との戦いにこそ、わたしがともにいるという、私の品性をあなたとともにするというわたしの愛の表れであり、意志の表れだから」と、イエス様が、聖霊様が、父なる神様が色んな事を通して語ってくださいます。

　今でも時折祈りますが、いつの時からか、こういう祈りをするようになりました。
　「主よ。私はなおも罪を犯す罪人です。だからお願いですから、お金に心縛られる者となりませんように。お金に心縛られている時には、どうかその縄目から私を解いて下さい。
　私の持っている力をもって相手をねじ伏せようとするジャイアンみたいな性質から、負けても、取られても、殴られても、転んでも、泣きながらあなたにすがり付くのび太のようにして下さい。
　あなたが私にこの世で与えてくださった宝物のうち、イエス様を除いて断トツ１位の宝物は私の妻ですから、私の妻にだけ目が行き、私の妻にだけ魅力を感じ、私の妻にだけ性欲を抱き、私の妻とのみ一体となり、私の妻と一体となることだけに喜びを覚える者として下さい」と、祈っています。

　これが、心の内に住んでいて下さるキリストゆえに、愛に根ざし、愛に基礎を置き、キリストの愛の広さ、長さ、深さ、高さを知りながら、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされる過程・旅程に置かれているということです。

## Part Four

　「神の満ちあふれる豊かさにまで、私たちが満たされる」というのは、ある日突然、天から摩訶不思議な手が伸びて来て、その手が私の頭の上にとどまり、一瞬にして聖人君子のような性格や性質や能力が与えられて、他の人たちとは違う何かすごい者となるようなことでもなければ、そういうことを誇るようになることではありません。

　また、「あの有名で、有能で、歴史を変える選手のような能力があったらどんだけいいだろうか」とか、「人類の文明という歴史に革命的な発見と開発をしたあの人のようなクリエイティビティーがあったらどれだけいいだろうか」というようなことが品性ではなく、キリストとともに、キリストによって、キリストともに生きながら、神の手のうちに入れられており、満たされていく途上にあるのがキリストの品性です。
　比較や競争するようなものではないので、そこには、嫉妬もなく、妬みや焼き餅のような不安な思いもなく、自己卑下や自画自賛もありません。
　そこにあるのは、ただ一つ、満たしのみです。
　聖なる満足のみです。

　この品性は、一朝一夕になるものではなく、日々の生活における至って日常の

生き様の中において戦う、長く、忍耐強く、簡単ではない訓練を通らされ、恵みとして体験させていただくものです。

家族のために朝早く起きて、朝食を作って、食べさせ、食器を洗って、洗濯して、仕事に行って、また、お昼を作って、夕方には弁当箱を洗い、また夕食を作って食べさせようとしたら、「え～、またカレー？」なんて言われながらも、グッとこらえて、逆に「ごめんね」と声をかけ、時には爆発して、週の始めの日曜日には礼拝を守ろうとすると、家族から、「え、今日も教会行くの？」と嫌がられ、という日々の戦いの中で養われていくのが、キリストとともにある品性です。

その、時にはうんざりしてしまうような毎日の生活において、七回ではなく七回を七十倍赦す戦いであり、右の頬を打たれたら、左の頬をも向ける戦いであるがために、何よりも難しく、何よりも困難で、でもそこを生きることこそが、キリストの品性が養われていく最も良い訓練の場であり、その私たちの人生の現場を訓練の場として下さっているのが、神です。

民数記１４：１－１１（パワポ）

乳と蜜の流れる約束の地カナンの地に入って行きたくないと、駄々をこね、天にまで届く程の不平不満を泣き叫びながら訴え、しまいには、モーセとアロンとヨシュアとカレブに詰め寄り、彼らを殺そうとまでします。

そんな中、何にも悪くないモーセが取った行動は、荒れ狂った民たちの前に跪き、ひれ伏すということでした。
民数記１６章にも、再びモーセが、荒れ狂う民たちの前にひれ伏す姿が記録されていますが、
うんざりしてしまうような出来事において、七回ではなく七回を七十倍赦す戦いをし、右の頬を打たれたら、左の頬をも向ける戦いをし、何よりも難しく、何よりも困難で、でもそこを生きることこそが、キリストの品性が養われていく最も良い訓練の場であるという神の御手を遜りつつ意識しながら、真に戦うべき戦いを戦い、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされるということを全うしようとしたのがモーセという人でした。

そして、そんなモーセのことを、聖書は何と記しているかと言いますと、

民数記１２：３（パワポ）
申命記３４：７（パワポ）

モーセは、キリストとともに、心の内に住んでいて下さるキリストゆえに、愛に根ざし、愛に基礎を置き、キリストの愛の広さ、長さ、深さ、高さを知りながら、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされる過程・旅程を全うし、満たされる

人生を歩みました。

Part Five

今、水曜礼拝で、ヒムチァン先生がヤコブの手紙の講解をして下さっていますが、そのメッセージの中でこういうことをお話しして下さいました。

「忍耐とは、苦しみや困難に耐えることではなく、私の我、私の思いについて行かず、神の御心や命令に従って行こうとすることにおける忍耐です。

自分に従わず、神に従うことを、聖書では、忍耐と言います。」

ヨハネの福音書１４：２３－２４（パワポ）

イエス様の言葉に従い行おうとするところ、人に、イエス様はともに住んで下さいますし、そういう私たちとともにいて下さるのが、イエス様です。

私たちがイエス様とともにいるというのは、頭と手が別にあってはいけないように、またもし別にあったら何の機能もなさなくなってしまうように、イエス様の意思が私の意思であり、私の動きや姿勢がイエス様の御心に通じるものであるというのが、キリストともにいることであります。

それこそが、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされるということです。

野球でホームランを打った時、球を見極めた目を褒めたり、打った手や腕を褒めたり、重心を守った足を褒めたり、打つ指令を出した脳みそ単体を褒めたりするのではなく、打ったその人全体を褒め、褒められるように、私たちもイエス様とともに同じように満たされるのです。

ただそれでも、イエス様にはお出来になって、私たちには出来ない出来なかったことがありますが、それは何でしょう？

十字架に架かって罪を贖うということです。

でもイエス様は、そんなご自分にのみ許された十字架のわざまでも、「ご一緒しましょう」と私たちに語り掛けなさいます。

それがあの有名な言葉、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分を否定し、自分の十字架を負って、私について来なさい」というあのお言葉です。

手が頭の命令に従って初めて、そこに調和があり、平和があり、仕事が出来るように、かしらなるイエス様の御思いに従おうとするのが、「神の満ちあふれる豊かさにまで、あなた方が満たされますように」ということです。

私たちが私たちに死に、キリストが喜ばれ、神が喜ばれることのために、隣り人と神の前にあって愛を表し、愛を広げていくことが、神の満ちあふれる豊かさにまで、私たちが満たされることです。

もちろん、これは、ここまで何度も話して参りましたが、私たち一人でなすこ

とも出来ないですし、なすことでもありません。

ヨハネの福音書１５：１－５（パワポ）

「人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまる」ことが、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされることであり、御霊の実を実らせる唯一の方法です。

Conclusion

最後に、一つのことについて問題提起をして終わりたいと思います。

洗礼を受けたら、信仰を卒業してしまい、礼拝にも、教会にも、クリスチャン同士の交わりにも行かなくなってしまうのは、何でだと思いますか？

色々な理由があるでしょう。

人に躓いたとか、なんか気持ちが覚めてしまったとか、教会が嫌になったとか、自分の思う通りに生きたいとか、いろいろな理由があるでしょう。

でも、そんな色々な理由の主な要点は、先週もお話ししましたように、キリスト教信仰というものが、もっぱらひたすらに、罪の赦しや罪赦されて天国に行くことばかりに焦点を当ててしまっているためだと思います。

つまり、キリストとともに、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされるために生かされており、生きなければならず、それを生きることこそが、罪の赦しの目的が果たされることであるということを知らない、または教えない、語らないからなのかもしれません。

罪の赦しや天国に行くことは目的ではなく、手段であり、目的はもっと他のところにあると、つまり、主イエス様とともにいながら、行き着くところ、どっちがどっちなのか分からないぐらいに一体となって、神の満ちあふれる品性に満たされて行くということです。

手段を目的に挿げ替えてしまったら、天国に行く道を見失ってしまい、行けるかどうかも分からないばかりか、行けたとしても、何の満たしも味わえずに、中身の空っぽのただ大きな空箱を手にして後悔し、呆れかえるしかなくなってしまうかもしれません。

だから使徒パウロは、そんなことがないように、親身に、熱心に、私たちに真実を説いてくれています。

私たちは、主イエス・キリストに生け捕られた者であり、もうこれ以上一人で孤独に生きる者ではなくなりました。

その完全な場に至るまで、栄光の場に至るまで、私たちがどれだけ多くの山を越えて、川を越えて行かなければならないのか分らない者ではありますが、もう既に、その道に入れられており、その目的に向かって行くことを求められている

者です。
　そして、私たちが安心できるのは、この道こそ私たちにとって幸いであり、喜びであり、誇りであり、祝福だからです。

　忍耐をもって相手に負け、譲り、その人のために祈り、七回を七十倍赦す戦いを、右の頬だけでなく左の頬も向ける戦いを諦めずに、遂行していきましょう。
　そうしたならば、私たちの心に湧き出るいのちの泉の水を味わうこととなるでしょう。

　お祈りいたします。

　祝祷：エペソ書３：１９